

「ていく・てくる」と“去・来”の日中対照研究

陳 湘奉

【キーワード】

補助動詞、方向補語、日中対応関係、非用、中国人日本語学習者

【要旨】

日中両言語において、「行く・来る」と“去・来”は空間的な移動を表す本動詞として対応し、それぞれ、あるものが基準点から「遠ざかる・近寄る」という移動行為を表す。つまり、本動詞としては、「行く・来る＝去・来」という対訳の構図で捉えられ、対応関係を持つと言える。

一方、もともと空間移動を表わす動詞から派生した補助動詞として用いられる場合にも、日本語における「ていく・てくる」の意味用法、文法構造、表現形式と、極めて類似した機能を、中国語の“去・来”も持つ。しかし、完全に一致するわけではないため、中国人日本語学習者は母語の影響で、「ていく・てくる」の補助動詞としての用法についてよく理解できないことがよく見られる。

「行く・来る」は移動動詞の中で最も基本的な動詞であるだけに、「ていく・てくる」の補助動詞表現も日常生活で多用されているが、中国人日本語学習者には、理解できないために産出する誤用や、使えないために敬遠する非用の傾向もよく見られ、習得の難関とされている。

空間移動本動詞から派生した補助動詞としての用法には、空間用法より遥かに複雑な時間的アスペクト表現や心理的認知表現があり、これらの方が難しいと思われる。したがって、中国人日本語学習者による「ていく・てくる」の習得を助けるため、日中両言語の繋がりを見つめることが有効であり、日中対照分析を行う必要がある。

本研究では、まず、日本語の「ていく・てくる」を主な研究項目とし、どのような多様な用法が存在するかを明らかにする。その際には、先行研究における用法を参考にす。次に、中国語の“去・来”を対照項目とし、そうした用法に対応する中国語訳と対照しながら考察・分析を行う。そして、中国人日本語学習者の使用実態およびその原因と合わせて、その習得に対して効果的な提言を行う。

1. はじめに

日中両言語において「行く・来る」と“去・来”は、選ばれた基準視点からの空間的移動を表わす本動詞として「行く・来る＝去・来」という対応関係を持つと従来の研究

では一般的に指摘されている。その一方、補助動詞として用いられる場合には、次のような対応関係を持たない例が少なからず存在する。

【非対応】(1) 外で 変な音 がした から ちょっと 見てくる わ。
外で がした 変な音 ていく 見る
 「外面 有 奇怪的声音, 我 因 看看。」

(1) を見ると分かるように、日本語原文での「てくる」は、中国語訳文において“来”と対応せず、“去”と対応する。加藤(2014)では、以上のような日中間の差異に対して、「ある場所から別の場所へ行って何かをして元の場所に戻る」という事態を表現する際、中国語では行く過程を強く意識するのに対して、日本語では戻る過程をより強く意識する」と、その理由を解説している。

日本語の「ていく・てくる」と中国語の“去・来”は、どちらも対応する移動本動詞から補助動詞として派生したものであり、明らかな類似性が存在する一方、(1)のように各言語の特性によって対応関係もズレてくるものと思われる。また、空間移動を表わすプロトタイプ用法より遥かに複雑な拡張用法の方に、さらなる多様な対応関係が存在するわけである。このように、母語からの影響や干渉の存在によって、中国人日本語学習者の「ていく・てくる」の誤用や非用の状況がよく見られ、補助動詞用法の習得はよく難関とされている。

以上から、中国人日本語学習者の習得を助けるためには、各用法での日中両言語の間の繋がりを洗い出す必要があり、そのため、日中対照分析を行うべきである。本研究では、日本語の「ていく・てくる」における多様な用法を明らかにし、中国語の“去・来”と対照して両言語間の対応関係を考察する。そして、中国人日本語学習者の使用実態およびその原因を分析し、その習得に対して、効果的な方法などを提案する。

2. 問題の所在

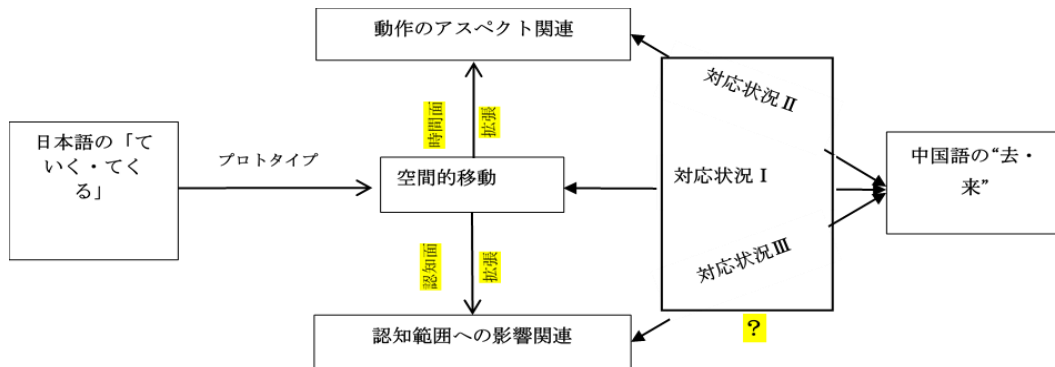
2-1 中国人日本語学習者の誤用を防ぐための日中対照分析

上述の(1)を見ると、具体的な移動を表す場合において、「てくる」と中国語の“来”が一般的な対応関係を持つ一方、非対応関係も存在するということが分かった。水谷(2001)は、外国人学習者にとって補助動詞の習得が難しい原因について、「動詞に動詞を重ねるという使い方になじめない場合もあり、また同じ補助動詞の用法が多岐にわたって複雑であることも考えられるが、最も大きな原因は補助動詞が持つ心理的な要素、とくに立場志向性の理解が十分でないためであろうと考えられる」と指摘している。

また、補助動詞としての「ていく・てくる」には、具体的な空間移動を表わすプロトタイプ用法に限らず、アスペクトに関わる時間的な変化や継続と、認知範囲への働きかけを表わす拡張用法も存在する。その上、中国語の類似表現の“去・来”との間には、(1)より複雑な対応状況が現れるから、中国人日本語学習者にとっては、母語からの

影響などで習得が困難になると考えられる。そのため、日本語の「ていく・てくる」と中国語の“去・来”が補助動詞として用いられる場合に、両言語の間の繋がりを解明することが、母語干渉の誤用を防ぐ有効な手段である。

以上を踏まえて、第5章では、日本語の「ていく・てくる」と中国語の“去・来”を対象として、日中の対応状況について対照分析を行う。



【図 A】 日中対照の考察中心

具体的には、図 A のように、「空間的移動」を表わす基本的な用法、およびそれから拡張した時間の流れに伴う「動作のアスペクト関連」用法と、主体の認知に働きかける「認知範囲への影響関連」用法、という三つのカテゴリーに分けて、それぞれ日中対照を行う。その結果に基づき、対応関係と非対応関係の原因を分析していく。

2-2 中国人日本語学習者の非用と習得への提言

JCK 作文コーパスのデータ収集の結果、および中国人日本語学習者に対して行ったアンケート調査の結果では、中国人日本語学習者においては、誤用のみならず非用の実態も見られている。したがって、第6章では、前章の日中対照分析および先行研究を踏まえて、その結果の原因を解明する。最後に、以上のすべての分析結果から、中国人日本語学習者の「ていく・てくる」の習得を助ける方法を考える。

3. 研究方法

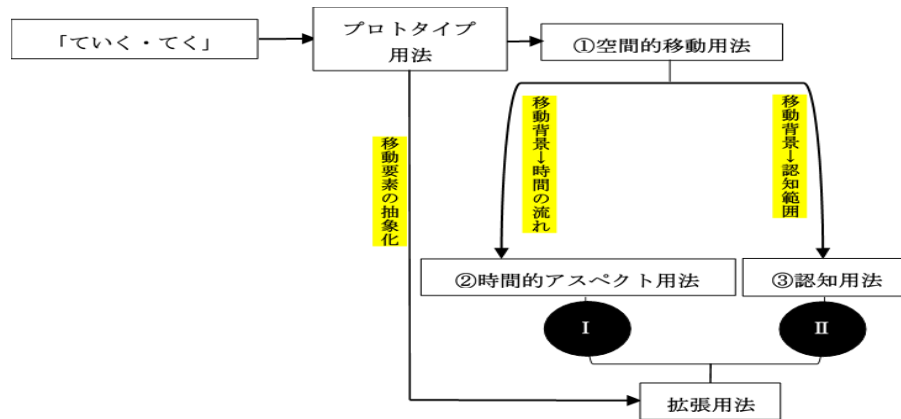
本研究では、中国人日本語学習者の「ていく・てくる」の習得を助けるために、その過程における誤用と非用の実態を課題として、それぞれ先行研究を参考にしながら日中対照分析を行い、また使用調査の結果も踏まえて、原因の分析を行う。

森田 (1994 : 90-99) は「意味論的な機能分析から「ていく」・「てくる」を空間と時間におけ、空間的意味は移動という具体的な意味を表わす本動詞の機能を果たしており、時間的意味はそれぞれ抽象的意味と機能的作用を表わす補助動詞の機能を果たす」と述べている。また、近藤 (1985 : 25-34) は「「～テクル」「～テイク」の用法を空間型と時間型との二つのカテゴリーに分けている。さらに時間型を変化型と継続型との二種類

に分類する。」と述べている。これらの先行研究を援用した上で、上述した二つの課題に対して次のようなステップに従い、それぞれ分析を進めていく。

日中対照分析

- ① 「ていく・てくる」の様々な用法について分類すること。



【図 B】 本稿における分類方法

具体的には、先行研究を参考にし、図 B で示した通り、空間移動を表わす「プロトタイプ用法」と、それから派生した時間的アスペクトを表わす「拡張用法Ⅰ」の「時間的アスペクト用法」と、認知範囲への影響を主に強調する「拡張用法Ⅱ」の「認知用法」に分類する。

- ② 上述の分類方法に従い、日本語例文を挙げ、その中国語訳文と対照することで、「ていく・てくる」と“去・来”の日中両言語間の対応状況を考察する。
- ③ 上記の対照分析の結果に基づき、対応／非対応の原因について分析する。

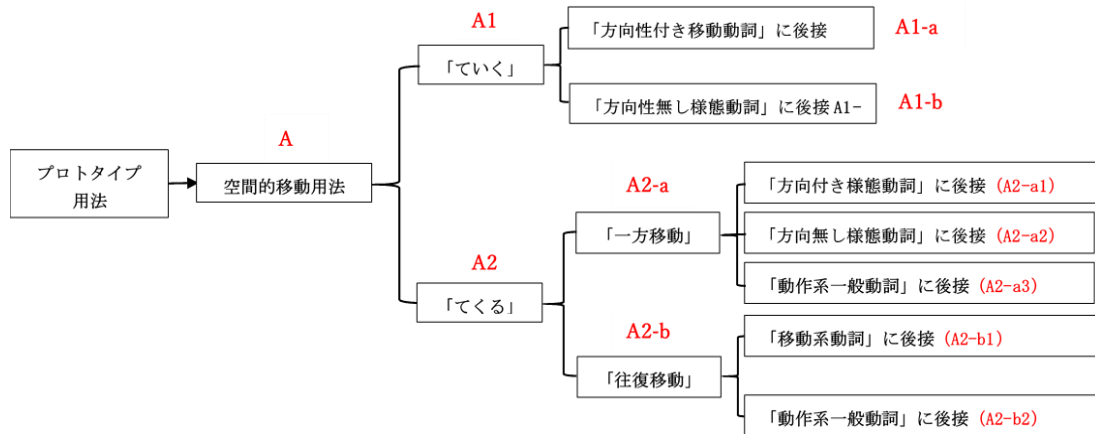
非用の原因の分析

- ① 中国人日本語学習者と日本人母語話者の「ていく・てくる」の使用数量の比較調査
- ② 中国人日本語学習者の使用実態のアンケート調査（非用率調査）
- ③ 以上の結果を踏まえて、「ていく・てくる」への習得に対して適切な提言を行う。

4. 「ていく・てくる」と“去・来”の日中対照分析

4-1 プロトタイプ用法 — 空間的移動用法

まず、「ていく・てくる」の「プロトタイプ用法」は、本来の移動動詞の「行く・来る」の特徴を受け継いで、前接する動詞に主導的、あるいは補助的な方向性を付与する。意味的には、対象の位置変化という空間的移動を表す用法であり、本研究では、この「空間的移動用法」を代表として、日中対照分析を進めていく。



【図C】「プロトタイプ用法」における「ていく・てくる」の分類

「プロトタイプ用法」として認定した「ていく・てくる」の「空間的移動用法」における細かい分類は、図Cのようである。図Cで示したように、分類された様々な用法に番号を付けて、「空間的移動用法」を「A」で、「ていく」を「1」で、「てくる」を「2」で表示すると、その下位分類用法は、それぞれ次のように順番に並べられる。

「ていく」:

- 「方向性付き移動動詞」に後接 — A1-a
- 「方向性無し様態動詞」に後接 — A1-b

「てくる」:

- 「一方移動」 — A2-a
- 「方向付き様態動詞」に後接 — A2-a1
- 「方向無し様態動詞」に後接 — A2-a2
- 「動作系一般動詞」に後接 — A2-a3
- 「往復移動」 — A2-b
- 「移動系動詞」に後接 — A2-b1
- 「動作系一般動詞」に後接 — A2-b2

次に、以上の細かい分類用法に対して、それぞれ具体例を挙げてみよう。

A1-a【対応】 (2) 日が 西に 沈んでいきます。

日が 西に 沈む ていく
「太陽 朝西邊 落 困。」

A1-b【対応】 (3) 少年が 学校に 走っていった。

少年 学校に 走る ていく た
「少年 朝学校 跑 困 了。」

A2-a【対応】

A2-a1 (4) 先生は 教室に 入ってきました。

先生 入る 教室に てくる た
「老师 进 教室里 困 了。」

A2-a2 (5) 彼は 走ってきたので 汗を かい た。

彼は 走る てきた ので かく 汗を た
「他 跑 来 的, 所以 出 汗 了。」

A2-a3 (6) この ドレス は、貸衣装屋 から 借りてきた。

この ドレス は から 貸衣装屋 借りる てきた
「这件 连衣裙 是 从 租衣服的地方 借 来 的。」

A2-b【非対応】

A2-b1 (7) 「行ってきます。」

行く
「我 走 了。」
「我 去 了。」

A2-b2 (8) 今日は、なんの 映画を 観てきた の。

今日は ていく 見る なんの 映画 た の
「今天 去 看 什么 电影 了 吗？」

以上の日本語例文とその中国語訳文を対照すると、A2-bの「往復移動」を表す「てくる」以外は、すべて日中の対応関係が成立している。対応関係を持つ「空間移動用法」の場合、「ていく・てくる」と中国語の“去・来”は、移動本動詞からの移動特徴を受け継ぐ。また、(2)～(6)から分かるように、五つの例文はすべて実質的な空間移動を表わし、その先行動詞に「ていく・てくる」を後接して表した対象の移動は、「いく・くる」で表す方向性と一致している。一方、「往復移動」を表す「てくる」で対応関係を持たないのは、A2-b1とA2-b2で、その理由が異なる。

まず、日本語では、「てくる」が移動動詞に後接すると往復移動を表わすが、そのうちの「復」の移動過程は起点も発生も曖昧であるから、「くる」の移動を厳密に表す中国語の“来”とは対応しにくいのだと考えられる。

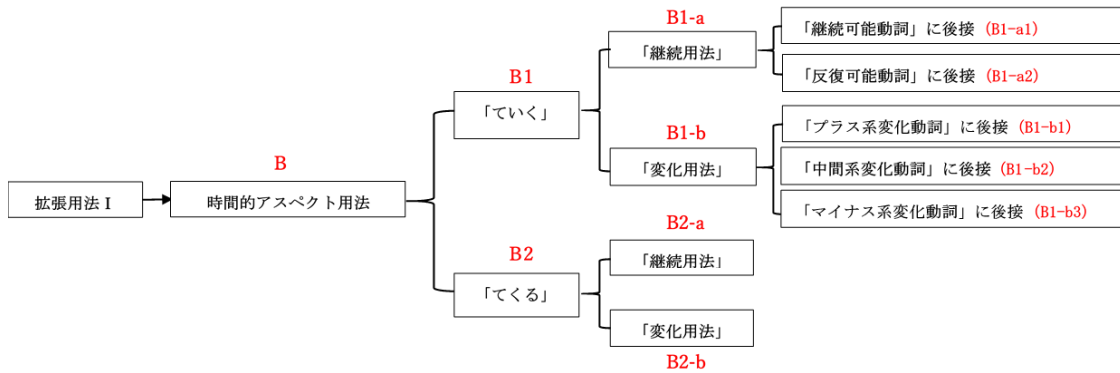
次に、A2-b2の場合には、(8)を見ると分かるように、「てくる」は“来”と対応関係を持たず、“去”と対応する。本動詞の移動の特徴を受け継ぐという点からいえば、加藤(2006, 2011)において指摘された、日中両言語の移動視点における差異である、と言える。また、高橋(2002)も指摘したように、「いく、する、くる」の3過程のうち、コトバに表現されているのが、日本語は前の2過程で、中国語は後の2過程なのである。この点は日中両言語における対立した特徴である。このような相違点から、前述したような対応状況になるのだと考えられる。

4-2 拡張用法 I — 時間的アスペクト用法

次に、「ていく・てくる」の「拡張用法」を見てみよう。4-1の「プロトタイプ用法」から、移動要素の一部、あるいは全部が抽象化された用法である。位置変化ではなく、事象変化を表わし、メタファーによる意味拡張に属する。本稿で扱う「拡張用法」は、この4-2の「時間的アスペクト用法」と、次の4-3の「認知的用法」から成る。

「ていく・てくる」の「時間的アスペクト用法」は、先行動詞で表わす動作による効果が、空間における位置変化ではなく、時間の流れに沿って主体に起きる変化—「変化の発生」、または変化から生まれ、そして維持されつつある新しい結果状態—「態の継続」

を表わす。本稿では、細かい分類をそれぞれ「変化用法」と「継続用法」と名付けた。「空間的移動用法」に比べて、移動ルートはそれぞれ空間軸と時間軸となり、主体はそれぞれに物と事である、という二点が、プロトタイプ用法と異なる。



【図D】「拡張用法 I」における「ていく・てくる」の分類

「拡張用法 I」の「時間的アスペクト用法」における分類用法は、図 D に示したようである。4-1 に倣い、分類された様々な用法に番号を付けて、「時間的アスペクト用法」を「B」で、「ていく」を「1」で、「てくる」を「2」で表示すると、その下位分類用法は、それぞれ次のように順番に並べられる。

「ていく」:

- 「継続用法」 — B1-a
- 「継続可能動詞」に後接 — B1-a1
- 「反復可能動詞」に後接 — B1-a2
- 「変化用法」 — B1-b
- 「プラス系変化動詞」に後接 — B1-b1
- 「中間系変化動詞」に後接 — B1-b2
- 「マイナス系変化動詞」に後接 — B1-b3

「てくる」:

- 「継続用法」 — B2-a
- 「継続可能動詞」に後接 — B2-a1
- 「反復可能動詞」に後接 — B2-a2
- 「結果残存動詞」に後接 — B2-a3
- 「変化用法」 — B2-b
- 「変化系動詞」に後接 — B2-b1
- 「形容詞+なる」系組合動詞」に後接 — B2-b2

4-1 と同様、それぞれ具体例を見てみよう。

B1-a【可対応】 (反復可能動詞の場合を代表として)

B1-a2 (9) 今後 も わが社 の 発展の ために 努力して^{ていく} つもりだ。

今後 も つもり ために わが社 の 発展 努力する (下因)。

「継続用法」の「ていく」は、ある動作や状態が、時間の流れに沿って、ある時点か

ら相対的に安定しているある状態を維持しながら、またはある動作を繰り返し進行しながら、未来まで継続することを表わす。そのため、継続の意味を持ち、明らかな変化を表さない先行動詞に前接する必要がある。

また、「継続用法」と呼ばれる以上は、「継続可能動詞」はもちろん、(9)の「努力する」のような「反復可能動詞」にも適用できる。動作の進行を点に譬えると、繰り返して進行すれば点をつないで線になるように、未来に向けた時間の流れにおけば継続の意味が表わせるからである。

また、(9)の日本語原文と中国語訳文を対照すると、「ていく」と“去”が対応関係を持つことが分かる。杉村(1982)によると、中国語は時間の流れを「上→下」で表わす言語であり、日本語で以後への継続状態を表す「先行動詞+ていく」は、中国語では時間軸における「下へ」と対応するのである。

一方、杉村(1982)によると、「中国語では、語義の中に「上へ」或は「下へ」という方向性がすでに内在している動詞がある」という。その場合、中国語では、“去”を使わず動詞のみで表わすことができる。

また、B1-a1が日本語と対応関係を持つ理由は、上述したB1-a2の場合と同じである。

B1-b【非対応】(プラス系変化動詞の場合を代表として)

B1-b1 (10) その映画で 評判になって 以来、彼女の人気は 日増しに 高まっていった。

以来 その 映画 評判になる 彼女の人気 日増しに 高まる
「自从 那部 电影 走红 以后, 她的人气 日渐 高涨。」

*【可対応】(マイナス系の変化動詞の場合)

B1-b3 (11) 日本では さらに 子供の数が 減少していく ことが 予想される。

予想される 日本では 子供の数 さらに 減少する ていく
「预计 日本的 儿童人口数 会 进一步 减少 (下^{ていく}国)。」

「変化用法」の「ていく」は、ある時点から変化が発生し、未来への時間の流れに沿って、変化が進行し続けながら、その効果が重なっていき、全体のレベルが上がっていくことを表わす。そのため、変化の意味を持つ動詞に伴って使われる。そのうち、(10)のようにプラスの変化を表す場合の他に、マイナスの変化を表す場合(11)も、中間の変化を表す場合も存在する。

(10)(11)の二例文、およびその中国語訳文を見ると、まず、「変化用法」での「ていく」は“去”と対応関係を持たないと言える。なぜなら、前述した杉村(1982)が指摘した中国語動詞に内在する方向性と関わるからである。

その一方、中国語の“去”は離れる意味のほか、消失の意味も含んでいる。したがって、積極的な意味とは共起しかねるが、(11)で示したように、マイナスの変化を表す消極的な意味とは共起できる。したがって、マイナス系の変化動詞に後接する場合、“去”と対応関係を持てるわけである。

B2-a【非対応】 (反復可能動詞の場合を代表として)

B2-a2 (12) 今まで 日本語を 勉強してきました。

勉強する 日本語 今まで
「学 日语 至今。」

* **【可対応】** (動作反復の結果による影響が後続する場合)

(12') 今まで 日本語を 勉強してきて、もう 話せるようになった。

結果による影響：日本語が話せる

日本語 今まで 勉強する てきて もう 話せるようになった
「日语 至今 学 (下来) 已经 能说了。」

「継続用法」の「てくる」は、B1-aと同様、ある状態や動作が、時間の流れに沿って基準時点まで継続したことを表す。しかし、B1-aと異なるところが二つある。

一つ目は、先行動詞として、「継続可能動詞」「反復可能動詞」のほかに、「結果残存動詞」も取れることである。

二つ目は、B2-aは過去の出来事を振り返ることを表わすため、B1-aのように、基準時点における進行状況を確認することより、基準時点までの累積状況の方が強調される。だからこそ、ある時点での静態的な結果を表す傾向を持つB2-aの「てくる」には、進行する動態のイメージが「ていく」より薄く、補助動詞として使われた場合にも移動のイメージが強く残る中国語の“来”とは対応しにくい。これが対応関係を持たない主因であると考えられる。

一方、B2-a2において対応関係を持つのは、動作反復の結果による影響が後続するからだと考えられる。なぜなら、影響が後続すると、自然に「動作反復一段階の結果—影響」のような動的に進む流れが出来て、そのため、中国語の“来”と対応できるようになるからである。(12')では対応関係を持てるのは、そのような理由による。このとき、“来”ではなく、“下来”と対応しているのは、(9)の「ていく」と“下去”の場合同じである。

B2-b【非対応】 (変化系動詞の場合を代表として)

B2-b3 (13) 日がたつにつれて、白鳥の数が ふえてきました。

白鳥の数 日がたつにつれて ふえる
「天鹅的数量 一天天 增加。」

(13') 白鳥の数が ふえました。

白鳥の数 ふえる た
「天鹅的数量 增加 了。」

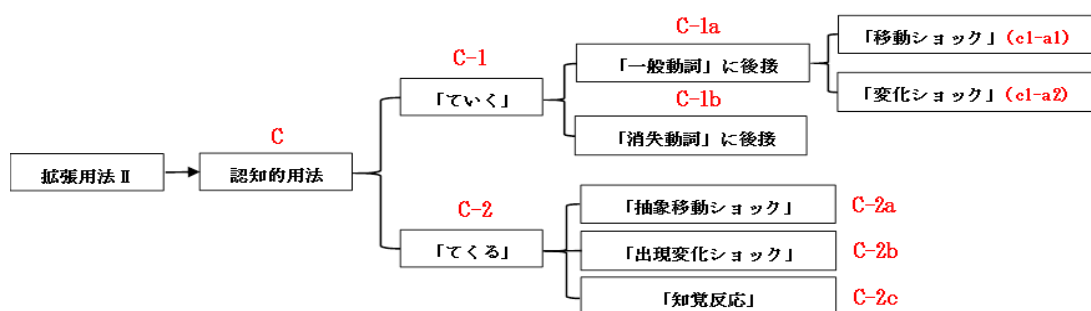
「変化用法」の「てくる」は、B1-bと同様、変化の開始時点から基準時点までの変化の進行に伴って、その効果が積み重なり、最後の基準時点で全体のレベルが上がっている様子を振り返る。と同時に、変化によって達した結果、あるいはその時の状況も示される。(13)で示したように、日本語原文と中国語訳文が対応関係を持たないのは、中

国語の変化動詞が含む方向内在性のほかに、加藤（2006）が指摘した日中視点移動の差異による。

4-3 拡張用法Ⅱ — 認知的用法

最後に、4-2 での「拡張用法Ⅰ」の「時間的アスペクト用法」に続き「拡張用法Ⅱ」の「認知的用法」について日中対照分析を行う。「ていく・てくる」の「認知的用法」は、先行動詞で表わす働きかけによって、主体の認知範囲に影響を及ぼし、その意識されたショックを強調するため、源となる動態事象を表す用法である。また、「空間的移動用法」「時間的アスペクト用法」と異なるのは、ただ移動・変化という事実を述べるのではなく、それをすべて抽象化した背景に置いておき、認知への影響のみを強調するところである。

この用法は、従来の研究では、よく「てくる」しか持たない特殊用法として扱われている。確かに、「ていく」のほうは、「てくる」より主体認知に対して影響の効果が弱く、それに用例もそれほど多くないが、本稿では一緒に考察分析していく。



【図E】「拡張用法Ⅱ」における「ていく・てくる」の分類

「拡張用法Ⅱ」の「認知的用法」における分類用法は【図E】に示したようである。4-1、4-2 に倣い、分類された様々な用法に番号を付けて、「認知的用法」を「C」で、「ていく」を「1」で、「てくる」を「2」で表示すると、その下位分類用法はそれぞれ次のように順番に並べられる。

「ていく」:

- 「一般動詞」に後接 — C1-a :
- 「移動ショック」 — C1-a1
- 「変化ショック」 — C1-a2
- 「消失動詞」に後接 — C1-b

「てくる」:

- 「抽象移動ショック」 — C2-a
- 「出現変化ショック」 — C2-b
- 「知覚反応」 — C2-c

それぞれ具体例を見てみよう。

C1-a【対応】

C1-a1 (14) しかし、突然、その天秤は 急激に 左へ 傾いていった。

しかし 突然 その天秤は 急激に 左へ 傾く ていく た
「可 突然间, 那天平 猛地 向左 倾 过^去了。」

(14) のような「移動ショック」を表す「認知的用法」は、ある移動がもたらす認知範囲からの消失による影響を強調するために使われる。認知範囲への影響と移動発生の現場性を特徴とし、普通の移動を表す「空間的移動用法」の分類と区別する。

C1-a2 (15) 徹夜の せいか、目が 落ち窪んでいった。

せいか 徹夜 目が 落ち窪む ていく た
「因为 熬夜, 两眼都 凹进 ^去了。」

一方、(15) の表す「認知的用法」は、(14) と同じように認知範囲へ影響をもたらすことを表すが、仕掛けるのが移動による消失ではなくて、変化による消失である。そのため、「変化ショック」と名付けた。認知範囲への影響と変化発生の現場性を特徴とし、「変化用法」とは区別する。

上記の二例及びその訳文を対照すると、「認知的用法」での C1-a の分類には、「ていく」と“去”が対応関係を持つ。その理由として、次の二点を挙げられる。

- ① 「移動ショック」→実質的な移動 }
「変化ショック」→抽象的な移動 } 本動詞の移動特徴が働く→「ていく」⇔“去”
- ② 認知範囲における消失現象に着眼する「ていく」⇔“去”の持つ「消失」の動態イメージ

①②は、それぞれ「ていく」も“去”も持つ「移動性」「消失性」に対応する。この場合の対応関係が成立するのは、「消失性」が主因であり、「移動性」が副因である。

移動性 < 消失性

C1-b【非対応】(16) 見てごらん、虹が どんどん 消えていくよ。

見てごらん 虹が どんどん 消える
「你瞧, 彩虹 眼看就 不见了。」

(16) のように、消失を意味する動詞に後接する場合に「ていく」で表す「認知的用法」は、「有→無」という現象を意味する、それに加えて、アスペクト・マーカ―として、完成態を示す役割も果たしている。

上例の原文と訳文を対照すると「ていく」と“去”が非対応関係を持たないことが分かる。それは、中国語の消失動詞に内在する方向性が、消失変化の方向を指示するだけでなく、失ったという完成態をも表せるからである。そのため、“去”のような補助的成分を添えると、意味が重なってしまい、逆に不自然になるからである。

C2-a【対応】 (17) 雨が 降ってきました。

雨が 降る てくる た
「雨 下起 来 了。」

C2-b【対応】 (18) 眼が くらんできました。

眼が くらむ できた
「眼 晕 起 来。」

(17) (18) が代表する C2-a と C2-b の「認知的用法」は、C1-a1 と C1-a2 と同様、認知範囲に働きかける、ショックの源として移動と出現変化を表す用法である。「ていく」「てくる」ともに、影響と現場性という二つの共通の特徴を持つ。

また (17) (18) とともに、「てくる」と“来”が対応関係を持つことが分かる。その理由として、C1-a の対応関係と同様、次の二点を挙げられる。

①抽象的な移動→本動詞の移動特徴が働く→「てくる」⇔“来”

②認知範囲における出現及び存在に着眼する「てくる」⇔“来”の持っている「現場に到着して中に入って残る」の動作から結果までの動態イメージ

C1-a とは異なり、この場合の対応関係が成立するには、「出現性」が主因であり、「移動性」が副因である。

移動性 < 出現性

また、C2-b では、「てくる」に対応して、“来”より“起来”が多用される。なぜなら、この場合の「てくる」は、出現とともに、事象の開始をも含意し、中国語の“起来”で表す「開始義」と合うからである。

C2-c【非対応】 (19) 少しずつ 霧が 晴れて、富士山が 見えてきた。

霧が 少しずつ 晴れる 見える てきた 富士山が た
「雾 渐渐地 散开, 能看 到 富士山 了。」

(19) のように、知覚反応を表す動詞に後接する場合、「てくる」の「認知的用法」は、認知範囲において「有→無」という知覚作用が働くことを意味し、そして何らかの結果に至った、という完成態を示す役割を果たす。

この場合に、対応関係を持たないのは、日本語の「てくる」で表す知覚作用の全過程が、中国語の知覚動詞に内在する方向性で表わせるからである。したがって、最後に獲得する知覚結果の動詞だけで、全過程をも表わせ、“来”を追加する必要がない。

また、(19)のように、中国語の知覚動詞の補助成分としては、“来”ではなく、“到”が多用さる。なぜなら、“到”は「至る」を意味する結果補語であり、“来”の代わりに、アスペクト・マーカ―の役割を果たすからである。

5. 中国人日本語学習者の習得支援

5-1 調査内容及びその結果

①使用数量の比較調査

調査項目：「ていく・てくる」

調査手段：JCK 作文コーパス

調査対象：日本人母語話者と中国人日本語学習者

調査結果：

調査項目	日本人母語話者使用件数 (件)	中国人日本語学習者使用件数 (件)
「ていく」	127	55
「てくる」	146	95
総計	273	150

②使用実態のアンケート調査 (使用率・非用率)

調査項目：「ていく・てくる」の非用率

調査手段：アンケート調査

調査対象：日本に在住する中国人日本語学習者 30 名

問題形式：

問：没有时间了，乘计程车去图书馆吧。

時間がないからタクシーに（**乗りましょう**・**乗っていきましょう**）。

調査結果：

調査項目	A「プロトタイプ用法」 「空間的移動用法」	B「拡張用法Ⅰ」 「時間的アスペクト用法」	C「拡張用法Ⅱ」 「認知的用法」
「ていく」 の非用率	63.3%	46.7%	76.7%
「てくる」 の非用率	35%	20%	35.6%

5-2 教育現場と習得への提言

以上の調査結果によると、中国人日本語学習者には、確かに非用の状況が少なからず存在していると分かる。第4章で誤用分析のために行った日中対照の結果をも踏まえて、また第二言語習得に関する先行研究も参考にした上で、「ていく・てくる」の習得に対して、次のように提言する。

- ①導入の順序の変更
- ②適当な母語提示を利用
- ③両言語の特徴に関して知るだけでなく、理解する。
- ④教育現場で図表の多用

6. まとめ

中国人日本語学習者が「ていく・てくる」の補助動詞用法を勉強する際、適切な理解や運用のためには、文法項目としての使い方を習得することが一番大事である。そのために、目標項目が持っている各用法の特徴のみならず、その間に存在する相互関係をも捉える必要がある。

特に、第二言語としての日本語教育の現場において、上述したような母語干渉からの誤用や非用を避けるため、日本語における各用法の関係のほか、中国語における類似表現との繋がりをよく洗い出すことも有効な手段であると考えられる。

本研究では、「ていく・てくる」を対象に、色々な面から日中両言語について対照分析を試みた。それによって日中両言語の差異を明らかにされた。第二言語の文法項目を指導する際の、適切な母語訳の提示などに役立つと期待される。第二言語を勉強する・指導する際に、いかに日中対照分析の結果を利用し、母語による干渉を減らしていけるか、そのためにどのようにして適切な提示を行うかについては、今後も続けて検討されていくべきである。

参考文献

- 高橋太郎（2002）「してくるの意味・用法」『日本語と中国語のアスペクト』日中対照言語学会編，白帝社，pp.15-40.
- 吉川武時（1973）「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房，pp.157-327.
- 近藤泰弘（1985）「補助動詞「てゆく」「てくる」の用法—＜視点の補助動詞＞研究序説—」『日本女子大学紀要文学部』34，pp25-34. 日本女子大学
- 杉村博文（1982）「方向補語「下」「下来」「下去」解説」『日本語・中国語対応表現用例集 VI』日本語と中国語対照研究会編，pp.73-89.
- 加藤晴子（2006）「中日対訳コーパスにみる“来”“去”と「くる」「いく」の対応状況」『明海大学大学院応用言語学研究科紀要応用言語研究』8，pp.87-104. 明海大学
- 加藤晴子（2011）「中日両語の叙述の視点と動作の方向性」『横川伸教授古希記念日中言語文化研究論集，古希記念論集編集委員会編』白帝社，pp.70-83.

（埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程）